加藤暁台の点帖資料（寛政二年）について ――江戸後期尾張俳壇の月並句合（一）

寺島　徹

安永・天明期の尾張の中興期俳人、加藤暁台（一七三二―一七九二）は、その晩年に月並発句合を行ったことで知られている。その月並句合は門弟たちによって受け継がれた。その展開を明確にする作業の一環として、暁台の暮雨巷とその周辺における未紹介の尾張月並句合資料（点帖）について、手元に集まったものを中心に順次紹介してきたい。

一　暮雨巷の月並句合

暁台の月並句合については、かつて拙稿「暁台の晩年と月並句合」（『連歌俳諧研究』94号、平成7年3月）で論じたことがある。月並句合については、尾形仂氏「月並俳諧の実態 一～四」（『俳句』4～6、9月号、角川書店、昭和50年）や、桜井武次郎氏「上方の月並句合」（『連歌俳諧研究』53号、昭和52年）以降、研究が盛んとなり、中興期俳諧に限っても、江戸俳壇の加藤定彦氏「生成期の月並句合―江戸俳壇を中心に」（『国語と国文学』71・5、平成6年5月）や、上方俳壇における永井一彰氏『月並発句合の研究』（笠間書院、平成25年）などの成果が報告されている。

ここで、中興期の月並句合について、その手順を概略的に説明しておきたい。江戸前期の前句付・雑俳や高判付句集などの都市における遊戯性の俳諧から、その興行形態を模して、江戸中期に発句合、月並句合が派生してきたことが知られている。とくに、地方系蕉門の月並句合の手順を記すと、まず募句ちらしで題を決めて募集を行い投句を募る。参加者は投句料を添えて投句を行う。（大規模な場合、投句は会所などでとりまとめられ、）集められた句を執筆が点帖に清書し、名は無記のまま宗匠に渡す。宗匠は批点をし、場合によっては添削し、判詞を記す。その点帖をもとに、入選者を記載した丁刷といわれる刷物が参加者に配布される。清書の巻（点帖）は、最高点を得たものに褒美として与えられることが多い。なお、丁刷は一年分や二年分をまとめて、一冊の本にして売り出すこともある。

暁台の行った「暮雨巷月並句合」もこのような過程を経て売り出されたものである。暮雨巷の月並句合は、暮雨巷一世暁台、二世桜田臥央にわたり行われた。井上士朗も月並句合を行ってはいるが[1]、大々的に行ったのは、その弟子の大鶴庵竹有（竹内塊翁）である。本稿から三回にわけて、暁台、臥央、竹有関係の月並句合資料（点帖）を紹介し、暮雨巷と、その周辺で行われた月並句合の展開の一端について論じてみたい。

二　晩年の暁台の動向と月並句合

暁台の月並句合は、その晩年に行われたことに特徴がある。暁台の晩年は京での活動が多くなっていた。二条家俳諧の創始と月並句合の催しを行ったのが晩年の最大の特徴である。暁台の場合、矢羽勝幸氏「榎本星布主催句合について―白雄と暁台の交渉―」（『連歌俳諧研究』68号、昭和六十三年）によれば、『俳諧四家選』等における天明七年からの白雄らとの共同の句合評が、発句合の初発と考えられる。天明七年から没年にかけて、これまでの研究史と筆者の調査をふまえ、暮雨巷の動向をもとに年表風にまとめてみよう（伊藤東吉氏「暁台年譜」（『暁台の研究』所収）によるものは（伊藤）とする）。

天明七（一七八七）　丁未　暁台五六歳

○春自序『桃青廿歌仙』（暁台）二冊を復刻する。
○春か。桂裏古希賀に龍髯杖の自画及び賀章を贈る（遺草・句集）。
○二月、伯先生主催の白雄、几董、闌更ら四宗匠による発句合に選者として参加する（『俳諧四家選』）。
○二月、星布催しの白雄との合評発句合『雛・田植・たなばた・おしの句あハせ』（加舎白雄記念館所蔵、矢羽氏前稿参照）に判者として参加（募集は、前年冬、返送は寛政元年五月）。
○四月、暁台京にあり、青蘿・几董・月渓（樵木町）と共に『続一夜四歌仙』を興行。
○四月序『都六歌仙』に青蘿との両吟歌仙一あり。
○五月、暁台御国住居を許される（力草）。
○五月、蘭芝（三月より上洛中）の旅寓に両吟歌仙あり（樗堂俳諧集）。
○伊予の蘭芝（樗堂）六月、洛東の客舎に暁台立句・蘭芝脇の歌仙一会あり。佳棠・臥央・東湖・凌湖・百池一座（樗堂俳諧集）。同じ頃、蘭芝を具して尾張に下るか。（つましるじ・伊藤）。旅客に歌仙興行『つまじるし』（蘭芝編・夏序）に素兄・昆明・稲城・呼道入集。
○夏、蘭芝編『つまじるし』に暁台序。一座の四吟歌仙一入集。
◆九月七日、蓼太没（七十歳）。同十八日、松下子東没（四十九歳）。

天明八（一七八八）　戊申　五七歳

△正月十三日、士朗伊勢の国に行き、獅子頭の神事を見る。
○正月末、暁台は、別業が類焼にあい、同三月尾張横須賀の村瀬帯梅を頼って、一時身を寄せた。「桃やなぎ沖の鷗も我に馴れよ　暁台」を立句とする表六句、『於宝路夜』（文化六刊）に出る。大阜・民情・帯梅・聴呉ら一座。
○暁台、亡母三回忌。（句集）。
○十二月刊の『夜のはしら』（万岱序・暁台編）に士朗付句三、発句七。暁台発句十一、歌仙四入集。他に珉丈・呂岱・楚分・卓池・純平・可有・木人・聴呉・台沖・北橘入集。
○梅間の『力草』の「白雪日記」に、この年尾張で越年した暁台と士朗が歌仙を巻く。

天明九年、寸茅舎の歳旦

松のひまにほのほの見ゆる花の春　暁台
あらし吹やむ鶯のかほ　士朗

○『天明八年知多連中歌仙』興行。
◆八月二十九日狙乃没。◆柳几没。

天明九／寛政元（一七八九）　己酉　五八歳

○寸茅舎よりの『天明九年歳旦』（暁台編）成。暁台発句二、三つ物二連入集。知多の連中が多い。他騏中・琴雅入集。
○夏、尾州暮雨門より摺物を出すか（几董遺稿・伊藤）。
○九月二十二日、若宮八幡宮に於て、暁台の「若みこや月に影さすおとこ山」を立句に千百年法楽之俳諧（百韻）興行。万岱・彪門・稲

城・圃暁・入素・楚分・士朗・執筆臥央一座（入素書留・暁台句集）。

○十月二十三日几董伊丹にて急逝、暮雨巷に追悼の俳諧一折興行あり。暁台「藁里歌」を作る（翌年、追悼『鐘筑波』）。

△宣長の来名を機に、亜満・岳輅・岱青・士朗らともに鈴屋門人録に署名する。伊勢に帰る宣長を送って、士朗が「松坂の松こそ春のとまりなれ」の句を詠む。

寛政二（一七九〇）　庚戌　五九歳

○正月七日、暮雨巷句座、九吟歌仙一巻成る（入素書留）。

○正月、暮雨巷月並句合はじまる（架蔵写本）。

○二月仙児ら「佐屋連中歌仙」興行。二月十三日、大和行脚を思ひ立った暁台の餞別会あり。士朗・羅城以下十五人一座。暁台は仙児を伴い吉野の旅に赴く（入素書留）。

○二月、佐屋の仙児亭に一泊、吉野に赴く（句集）。

○二月、『暮雨巷月次五題』の丁刷記録はじまる（寛政三年八月まで）。

△卓池旧蔵の『仮題暁台門書留』に三月五日、枇杷園花見で星隼・紀鳳ら発句。三月十二日興行の歌仙で入素発句、白図脇、紀鳳第三、士朗付句。三月二十八日、士朗亭興行の歌仙等あり。

○**四月、暮雨巷月並句合四月興行（点帖・本稿参照）**。

○五月二十日、大高の墨山宛の書簡に、暮雨巷月並句合の五月五題を臥央へ早く出すように促す。また、四月の丁刷についても、「四月之開巷摺出しさし上候。先達而士朗方より進じ候様ニ覚申候所、いまだ無其儀候らはゞ、延引之事恐入候。」と述べる（五月廿日付墨山宛暁台書簡・名古屋市博物館蔵）。ただし、当書簡は、寛政三年五月の可能性もある。

○六月九日、僧他郎没す。暁台、京にてこれを聞く（句集）。

○九月暁台、月居とともに二条家に召され宗匠免状を給はる。三日、御目通仰付けられ、四日円山端寮において習礼、五日暁台花御会を勤める。二条治孝の発句に暁台脇の百韻あり（二条家俳諧記・翁草・一覧集）。門人五寅の句控に「暁台翁二条家より花ノ下日本俳諧の棟梁の号を下されし時賀に」の詞書見える（伊藤）。九月五日二条御殿で『中興御俳諧之百韻』が興行され、宗匠暁台、脇宗匠月居に続いて、士朗は萌黄散服を着用し、多くの門葉の筆頭に着座した。臥央は執筆。（『二条家御中興俳諧』）

○十月序『よし野紀行』（紫暁編）に暁台発句一。

○『二条御殿中興之俳諧百韻』に墨山・弁二・芦涯・仙児ら入集。

△『二条家御俳諧記』には、「士朗暁台の後を命ぜられども御会不勤」とあり、士朗は暮雨巷二世の座を臥央にゆずることとなる。

◆学海没（四十九歳）。

寛政三（一七九一）　辛亥　六〇歳

○正月、暁台二条家御初懐紙を勤める。「この殿に千代植添ん松の苗」（仮題暁台俳諧七百韻）。

○『暮雨巷歳旦』（暁台編）を出す。

△士朗、多度参詣の道すがら尾張藤浪の亀六亭に投宿したおりの撰集『楽書日記』（翌年二月刊）に、「二月十三日、多度の山に赴き、藤波の里にたどり着く。亀六亭投宿の半吟歌仙に立句。」と記されている。別名『多度山紀行』ともいう。

△卓池、四月朔日より七月初旬まで奥羽紀行の旅。

○四月、暮雨巷月並句合四月興行（点帖『しづのおだまき』）。

○六月、青蘿没『水の月』（冬序）冬の部に暁台挽詞。

○秋、大高連中墨山亭歌仙興行。横須賀に遊ぶか（『落梅花』帯梅詞書参照・伊藤）

○十月、暁台、若狭を巡歴して京の桃睡亭に着く。二十七日、白山通三条北の一閑室に移る。十一月十日頃より喉の病こうじて食道が腫れる（『落梅花』）。十一月十五日より病臥。
○前年からの『暮雨巷月次句合』（暁台編）に士朗発句十七。庭甫・物裁・五寅・雨暁・夜来・也梁・渡鵲・葭涼・兆雲・巨川・満子・雨滴・亀六・兎石・青霞・啓甫・之楓・志同・巴江ら入集。
○学海（楽山）追善『手向草』（伝芳編）に発句一。
◆六月十七日、青蘿没（五十二歳）。七月六林没（八十二歳）、九月十三日、白雄没（五十四歳）。

寛政四（一七九二）　壬子　六一歳

○人日、庵の会始、百池執筆「玉簾にきこし召らん薺うつと」（『落梅花』）。
○薩摩より完而書信見舞（『落梅花』）。
○正月十九日夜、暁台危篤に陥る。五更の刻（廿日午前四時頃・伊藤）一月二十日午前三時、暁台が京在住のまま世を去る。京都京極四条の南大雲院に葬る。法名春光院暁台居士（六十一歳）。また尾張古渡洞仙寺に名印一つをうずめて塚を築く。
○『落梅花』（天之巻桃睡編・地の巻臥翁編・寛政五年五月刊）二月二十日、初月忌名古屋古渡洞仙寺の法会の百韻の、初七日枇杷園興行の歌仙あり。二七日桂葉下興行、四七日春日居、五七日鴎巣、六七日岱青亭、七七日五周亭、百箇日暮雨巷に、それぞれ暁台追善の歌仙を興行している。
◆八月、暁台の師である白尼没する（八十四歳）。

晩年の暁台は、暮雨巷の尾張門弟は士朗に任せ、二条家俳諧等、もっぱら京都を中心に動いていた様子がうかがえる。軌を一にして行われた暮雨巷の月並句合も、京都と尾張を行き来しながら行われたものと推測される。新たに手にした点帖資料をもとに、その指導の様子について考察してみたい。

三　暁台月並句合の点帖の紹介

暁台の暮雨巷月次句合における未紹介の点帖（架蔵）を俎上にあげたい。まず、書誌を記そう。

書誌

装幀　半紙本一冊。袋綴。
表紙　濃縹色、亀甲紋、艶出
寸法　縦二三・八×横一六・七糎。
題簽　無。剥落か。
丁数　墨付き百丁。
行数　半丁につき五句。
投句人数　七十三名。
寄句数　九百七十一句。
奥　右僻墨暮雨周挙「後一」（朱文方印）
書写者　句―執筆　判詞・添削・入選句の転記―暁台筆
点印　「春艸新生」「坐酔桃李唇」「採金蓮擲玉簪」
年代　寛政二年四月
所蔵　架蔵

おそらく、蕪村、暁台研究者として知られた清水孝之氏の旧蔵になるものと推測されるが、蔵書印等はない。
まず、年代であるが、この点帖が、寛政二年四月のものであること

は、『暮雨巷月並句合』（丁刷）の配列からは判然としない。暁台の門弟、木吾の投句控（『俳諧随筆』五〇四、堀田文庫蔵）の寛政二年の位置にある次の記述から明らかになる。

四月分名古屋寄

五　灌仏に御作の沙汰ハなかりけり

五　蚊の声に仏子を投て宵寐哉

五　時鳥百千とりでも地に隠す

木吾は、投句した句の中で、五点（春艸新生）以上の高点を得た（灌仏会）（蚊）（時鳥）の句をこのように抜き書きし書き留めている。架蔵の暁台点帖（以下、『暁台点帖』（寛政二年四月）とする）にぴたりと一致することから寛政二年四月であることは明らかである。既出の点帖『しづのおだまき』（寛政三年四月、藤園堂蔵）[2]のちょうど一年前の点帖ということになる。ただし、この三句は、木吾でも、梧琴でもなく、隠子として投句していることが点帖からわかる。五点（春草）は丁刷には省略されるため、点帖と投句控の照合によってわかる情報である。年次が確定できたところで、点帖と対応する丁刷『暮雨巷月並句合』（藤園堂蔵）をひいておく。

四月五題　　採蓮三句

梅は酸くさくらは甘し仏生会　　楓達（チタ）

蚊ひとつを工夫して打額かな　　大阜

笋の老てわか竹と成にけり　　夜来（ツシマ）

ほとゝきす

郭公待には長き夜なりけり　　菊渓（ツシマ）

身をしほる声か高ねの子規　　白図

時鳥つゝかけて行みやこかな　　閭毛

時鳥矢脊は名高き田舎かな　　羅城

きのふ降けふ又雨やほとゝきす　　嶋原遊女　七淀

ほたむ

暮かけてはなに呼吽の牡丹かな　　白図

白ほたむ威有て情こもり鳧　　閭毛

牡丹みや金屏の絵は霊聖女　　沂風

灌仏

朝風や誕生仏しの腰ころも　　岱青

撫子のはなもさくなり仏生会　　〃

灌仏やはかなき世とも申されす　　夜来（サヤ）

灌仏や日の本は日の出るころ　　志同

蚊

昼の蚊のこのて柏にとまりけり　　騏六（キヨス）

蚊の声や親をかこひて子も思ふ　　梅呉（サヤ）

蚊はしらや蟻の塔くむ其ほとり　　仙布（ツシマ）

かのこゑに馬の前かく月夜かな　　桂裏

夕月に蚊の声かゝるちまた哉　　沂風

ひるの蚊の後ロせめるや常念仏　　里卜（チタ）

笋

筍や野のみやの苔堀崩し　　岱青

月は笹に竹の子穿旦かな　　簑待

笋や爰やかしこの芝かくれ　　雷布（ヲカサキ）

竹の子や瓢から出す米二升　　紀鳳

右桃李　二十二句

春草　百六十三句省之

ここからは、おもに、既出の『しづのおだまき』（寛政三年四月）

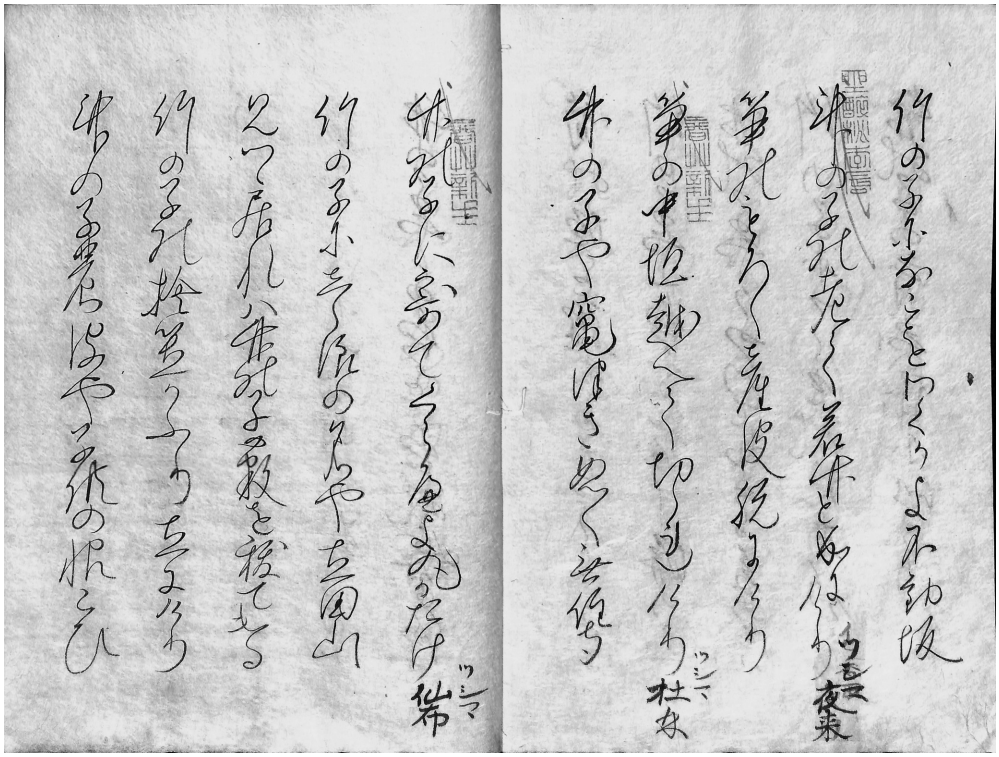

図１『暮雨巷月並句合』暁台点帖（寛政二年四月）（架蔵）

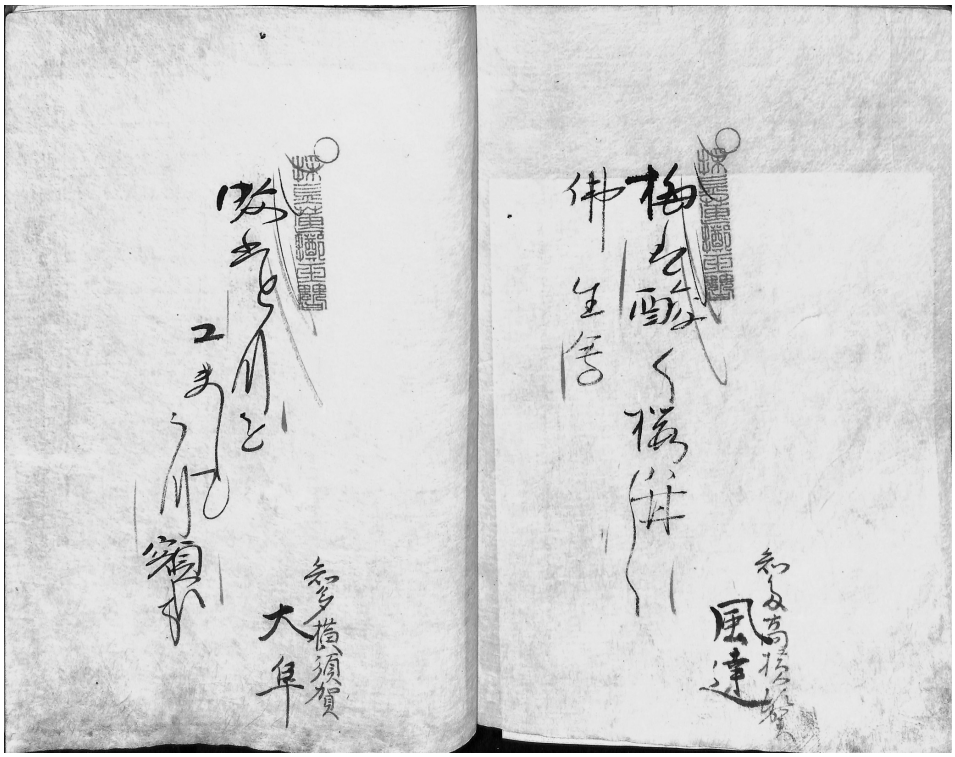

図２　『暮雨巷月並句合』暁台点帖（寛政二年四月）入選句「桃李」印

三七

図３　『暮雨巷月並句合』暁台点帖（寛政二年四月）　落款

を参照し比較しながら見ていきたい。

まず、点帖の体裁について確認しておきたい。点帖では、「時鳥」「牡丹」「灌仏会」「蚊」「笋」の順に掲出されている。丁刷でも、この順であるので、基本、点帖をもとに、丁刷を仕立てていった様子がわかる。点帖では、各題に「春艸」印と「桃李」印を捺され、「春艸」印以上の句には句主が明記される（○朱印は無記名のままである）。「桃李」印の中から三句が選ばれて巻末に暁台によって転記され（図1～3参照）、「採蓮」印を捺す、そのあと、巻軸の部分に「僻墨暮雨周挙」の落款がある。一方、『しづのおだまき』では、やや手順が異なる。寄句全体への押印は「春草」印のみで、その直後に「僻墨暮雨周挙」の落款があり、落款につづく裏の丁に、「春艸」印の中から、「桃李」印を捺す二十八句および「採蓮」印の二句を選び出し、暁台自ら落款のあとの丁に記すという二段階の手順になっている。『暁台点帖』（寛政二年四月）のように、寄せ句全体が清書された部分に、数種類（この場合二種類）の印があると見落としも生じやすいと想像される。『しづのおだまき』のように、最初に大ざっぱに「春艸」印を付け、つぎに絞り込んで入選句を最後にまとめて転記する方法の方が、丁刷に仕立てやすかったものと思われ、このようなやり方に変化したのであろう。

寄せ句総数についてみておきたい。寛政二年の点帖が、九百七十一句で、『しづのおだまき』の六百七句を大きく上回っている。参加人数も、春草印以上を得ている者という条件付きではあるが、点帖が七十三名、『しづのおだまき』が五十二名となる。ただし、丁刷末尾には、毎月「春艸〇〇句省之」と記されており、この記述と丁刷の入選句数から勘案すれば、その月の総寄句数の多寡はある程度つかむことができる。点帖によることで、それがより具体的に把握できるということになる。

七十三人の参加者を地域別にみると、尾張名古屋は、士朗、六林を

はじめ二十名余、尾張知多は大阜、帯梅ら横須賀連中と墨山ら大高連中の十一名、尾張津島は木吾ら十五名、尾張佐屋十一名、岡崎は卓池、趙晁ら四名、尾張清洲の騏六、近江の沂風、京都島原遊女七淀となっている。『しづのおだまき』との大きな違いは、佐屋連中の参加が多くみられることである。

次に、点帖から見える添削の様相についてみたい。これまで、暁台の発句合の点帖は、『しづのおだまき』の他、『初ゆき』『浦の苫屋』（いずれも蓬左文庫寄託堀田文庫蔵）が知られており、ある程度、添削の傾向はうかがうことができた。今回の点帖は、寄せ句総数が多いため、添削の傾向をより正確につかむことができるようになると思われる。

「季節」「表現」「切字」「仮名遣い」の添削についてみていきたい。

まず、「季節」について。

杜宇闇の砧（秋カ）やひろひ物　　帯梅（チタ）

季重なり、季語の問題に、暁台は厳しい面がある。とくに季移りが重要となる連句評点においてその傾向は顕著である。[3] 発句においても、その厳しさの一端がうかがえる。

つづいて「表現」について。

（春）一二輪（赤く白く）たつふと咲し牡丹哉　　甫暁

暁台は牡丹の風情にあわせ、常套の一輪、二輪という措辞ではなく、より色彩豊かな表現に添削している。蕪村は色鮮やかな牡丹の名句が知られるが、交流の影響なども今後の課題であろう。

（春）蚊の声の薮（水）に落合ふ夜明哉　　雲子

薮を水に変更している。「薮」―「蚊」という常套的な取合せを添削したものか。

（坐）後ロ（の後口）から昼の蚊せめる（や）・常念仏　　里卜（チタ）

（春）降たりと天を指さす（か）・誕生仏　　凌陰（ツシマ）

里卜の句は、「後ロから昼の蚊せめる」では散文的な表現であり、語順を整え、「や」を入れることで韻文たらしめようとしたものか。「降りたりと」の句も同様のことが指摘できよう。これは、切れ字に関わる指摘でもあったのだが、より初歩的な切れ字に関する指導もみえる

○　暁や蚊の寄軒や（の）雨やどり　　白図

○　竹の子やの天も貫く育かな　　志同（サヤ）

「暁や」では、切字「や」が重なることに対して添削する。「竹の子」句では、いわゆる「や」と「かな」の切字の重なりを否定し、添削を試みている。暁台が切字にについて強いこだわりをもっていたことは、盟友の蕪村との百池を介したやりとりにおいて広く知られるところである。[4]

「仮名遣い」についての指摘も目立つ。

子規鳥屋も價しらぬこへ（ゑ）　　（無記名）

（春）杜鵑一こへ（ゑ）須磨の潮くもり　　亀六（ツシマ）

蚊のこへ（ゑ）や誰を喰ふとて明屋敷　　（無記名）

蚊のこへ（ゑ）や茶釜のにへる草の庵　　（無記名）

蚊のこへ（ゑ）のおのれに狂ふ夜明哉　　（無記名）

中世から江戸時代までに多くみられる、「こへ」の仮名遣いを難じ、契沖仮名遣い（旧仮名遣い）に則る「こゑ」の表記に添削している。暁台が壮年時にくらべ、晩年、正しい仮名遣いにこだわったことについて述べたことがある。[5] 第二節の年譜にもかかげたように、寛政元年に、暁台の暮雨巷高弟たちもこぞって鈴屋門に入門していることを考慮しても、国学復興の時勢における仮名遣いの添削指導は、暁台の指向性を強く表したものといえよう。

種々の観点から添削をみてきた。概観して思うのは、一年後の『しづのおだまき』に比べると、比較的初歩的なミスに関する指摘、添削が多いように感ずる。寛政二年の四月は、暮雨巷において恒常的な月並句合が行われるようになって、まだ半年足らずであったため、この

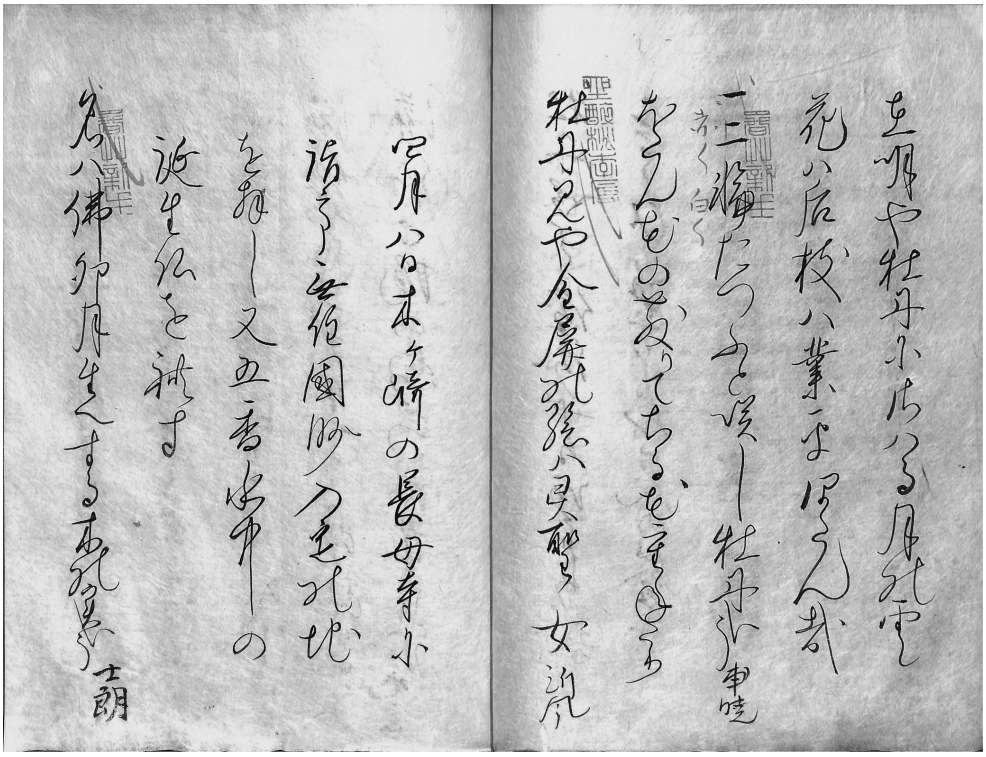

図４　『暮雨巷月並句合』暁台点帖（寛政二年四月）「名ハ仏」士朗句

ような形式的な指摘（つまり指導）が多くみられたのだろうか。今後の新たな点帖の出現が待たれるところである。

なお、士朗、卓池ら暮雨巷の高弟の発句を高点のみではあるが、新たに拾うことが可能となることも、このような点帖の意義といえる。士朗の例をあげよう（いずれも「春草」印）。

一息に山ほと、ぎす海の上　士朗
夜は蚊帳の萠黄匂ひや子規　士朗
春の名残いまだ牡丹を立さらず　士朗
唐の芳野ハはなの牡丹哉　士朗
名ハ仏卯月生へする木の実哉　士朗（前書あり）
釈迦はけさ摩耶が高根の捨子哉　士朗
蚊に句あり蚊屋かさぬ宿の壁の月　士朗

「一息に」句のみ、『寛政三年暁台門書留』（卓池旧蔵）により、かつてから知られていた句であるが、他の六句は暁台の高点を得ながらも、丁刷に載る点数ではなかったため、これまで知られることのなかった句である。とくに、「名ハ仏」句は、尾張木ケ崎の長母寺を訪ねたおりの前書が四行にわたって付され、士朗の寛政二年四月の伝記事項も補うことができる（図４参照）。とともに、このような月並句合の点帖に長めの前書を付して投句する行為は、投句者が宗匠にわかってしまいかねずやや異例と思われる。このような点も、地方系蕉門における初期の月並句合が遊戯性より、鍛錬性、指導性を求めていた一面を表しているのではないだろうか。

＊

以上、未紹介の点帖をもとに、そこから、うかがうことのできる「暮雨巷月並句合」の催しの一端について紹介・考察してみた。引き続き、暮雨巷と暮雨巷周辺の月並資料について検討していきたい。

注

1 服部徳次郎氏編『真野家文書』（平成７年３月、豊明市役所市史編纂室）に士朗が月並句合を催している例が示される。

2 筆者は、同書を拙稿「暁台の晩年と月並句合」等において『寛政三年暁台添削』と呼んでいたが、永井一彰氏『月並発句合の研究』（既出）に従い、『しづのおだまき』とする。

3 暁台評『百歌仙』（名古屋市博物館蔵）等参照。

4 安永六年に蕪村と暁台が百池句の切字の推敲・添削をめぐり、お互いの切字の作法観をもとに牽制しあった一件があった。

5 拙稿『江戸中期の俳諧における仮名遣いについて』（『桜花学園大学人文学部研究紀要』８号、平成18年３月）参照。

［付記］本稿は科学研究費の研究助成（基盤研究（C）課題番号17K02471）ならびに金城学院大学・特別研究助成による成果の一部である。貴重な資料について、ご教示いただいた藤園堂書店伊藤圭太氏に深謝申し上げます。